

# アメリカ人元捕虜家族との交流会 2016

～夫や父の捕虜体験は、家族にどんな影響を及ぼしたのか？～

2016年12月8日(木) 於 東京麻布台セミナーハウス

外務省の招聘で来日した元捕虜の妻や娘、孫娘計9人のゲストをお迎えし、全体で約40人の参加者がありました。小宮まゆみと田村佳子の司会、舞尚子の通訳で、夫や父や祖父の捕虜体験を、家族がどう受け止めたのかを語っていただき、実り多い交流となりました。



## 1. ローズ・ブリッジスさん(Mrs. Rose BRIDGES) 87歳

夫は元捕虜の故 Talmadge BRIDGES: 米陸軍砲兵隊。コレヒドールで捕虜→カバナツアン、ラス・ピナスなどの収容所→日昌丸で日本へ→大阪第1分所(大阪市)→大阪第5分所(福井県敦賀市)

介添人:娘 モナ・ウッドリングさん(Ms. Mona WOODRING)

### ローズさんの話

夫は25年前に亡くなりました。戦争から帰った時はやせ細って体重は80ポンド(約36キロ)でした。戦争から帰ると米政府にはとても失望し、何年もの間複雑な思いだったようです。政府から口封じをされて

「捕虜体験を決して他の人に語らない」という誓約書に署名させられたからです。老いてからガンで亡くなりましたが、口不封じをされたことで精神的につらい思いをしたと思います。体験を他人に話すことも出来ず、もし話したらカンザス州の刑務所に入れられてしま

うかもしれないと思っていました。来日できてとても嬉しいです。皆さんに会えたこともうれしいのですが、昨日は幼稚園を訪れ子供たちに会いましたが、とても感動しました。

### モナさんの話

ちょうど今日(12月8日)が父の誕生日です。生きていれば94歳になっていました。父が帰還した時、体重は67ポンドまで激減していて、病院で1年間療養しました。子供が3人いましたが、私は父



左からモナさん、ローズさん

の愛娘で、私たちも父をととても愛していました。近所に日系アメリカ人が住んでいて、父は彼とよく日本語で話していました。私たちの間には何のわだかまりもありませんでした。彼は何か所ものキャンプを経験しています。コレヒドールで捕虜となり、ヘルシップで日本へ送られ、日本では父自身名前もよくわからない所に收容され、計3年半の捕虜生活を過ごしました。父は戦争の後遺症で、ゆっくり歩くことができず、いつもせかせか歩いていました。それはきっと戦争中早く歩くことを強制されていたからではないかと思います。フィリピンの人たちは、自らの危険も顧みず、アメリカ人を助けてくれ、食べ物くれたり、草むらで音を立てずに歩く技を教えてくれたりして、多くの人の命を救ってくれたので、父はととても感謝していました。来日できたことに心から感謝しています。父が生きていたなら、喜んでこのプログラムに参加したことでしょう。

## 2. ドリス・デ・ビボさん(Mrs. Doris DE VIVO) 90歳

夫は元捕虜の故 Frank DE VIVO: 米陸軍第59沿岸砲兵大隊→コレヒドールで捕虜→カバナツアン、ラス・ピナスなどの收容所→北鮮丸で台湾へ→員林 or 屏東の收容所→めるぼるん丸?で日本へ→仙台第8分所(秋田県小坂町)

介添人:孫娘 マッケンジー・シュニッカーさん(Ms. Mackenzie SCHNITKER)

### ドリスさんの話

夫は18歳で入隊しました。私たちは近所に住んでいましたが私は当時13歳で、彼をととてもカッコいいと思っていました。戦争から帰ってきたときは24歳で、私は19歳でした。彼は帰国後90日間入院し、それから私たちは交際して結婚しました。67年間の結婚生活の後、4年前に亡くなりました。4人の子供と11人の孫と曾孫もいます。夫は戦争の話はしたがありませんでした。カウンセリングも受けましたが、退役軍人として十分なリハビリをしてもらえませんでした。

鉄道会社に勤めましたが、60歳を目前に窓際族のよ

うな立場に追いやられ、それに耐えられずに退職しました。晩年は悪夢に悩まされました。リハビリが受けられたら、夫も回復し、苦しまずに済んだことでしょう。夫は戦争について不平を言うことは無く、アメリカ人も日本人も、それぞれ為すべきことをしたんだろうと言っていました。

### マッケンジーさんの話

私は祖父のことは祖母ほど知りませんが、祖父は子どもや孫たちをととても愛してくれました。祖父には戦争後遺症のようなことがありました。例えば物音に過敏で、レストランでお皿が落ちると過敏に反応することがありました。私たちはそうしたことに配慮して、そういう場所には行かないように気を付けていました。今回この機会にととても感謝しています。まさか祖父の抑留された日本に来られるとは思っていませんでした。亡くなった祖父の代わりに来られたことを嬉しく思います。(感極まって嗚咽し、言葉が続かず)



左からドリスさん、マッケンジーさん

### 3. クリスティン・ダールストロムさん(Mrs. Kristin DAHLSTROM) 78 歳

父は元捕虜の故 William J. ELLIS Jr.: 米陸軍補給部隊。コレヒドールで捕虜→カバナツアンの収容所  
→鴨緑丸/江の浦丸/ぶらじる丸で日本へ→福岡第3分所(八幡→小倉)で死亡。

#### クリスティンさんの話

私の父についての話は他の人たちととても違います。他の方々は18歳とか若い時に戦争に行きましたが、父は戦争に行った時、既に38歳でした。そして結局帰ってきませんでした。父がいた収容所や父の乗ったヘルシップについては知っていますが、父がどのように苦しみどのように死んでいったのか、辿った道の詳細は知りません。父から直接話を聞く機会は無かったのです。でも1つだけ良かったと思うのは、(生還した人たちのように)戦後帰国してからの苦しみを経験せずに済んだことです。お話したいことは沢山ありますが、日本に来て本当に良かったと思っています。どうしてこんなに親切で素晴らしい人たちと戦争をしてしまったのでしょうか。世界中で、何万人もの子どもたちが、父親の存在なしに育つ結果となってしまいました。私は今78歳ですが、娘が父親の傍で育つのが見ることが出来ました。私自身は父がいなくてさびしい思いをし、父親のいる娘たちを羨ましく思うこともありました。私もアメリカで戦争に反対する団体の役員をしていますが、戦争の悲惨さや戦争の生み出す憎しみを二度と繰り返さないために、若い世代に伝えていくことが大事だと思います。これからもこうしたプログラムを末永く続けて欲しいと思います。



クリスティンさん

### 4. パトリシア・トンプソンさん(Mrs. Patricia THOMPSON) 84 歳

夫は元捕虜の故 Clarence A. THOMPSON: 米第4海兵隊。コレヒドールで捕虜→マニラ港周辺の収容所→日昌丸で日本へ→福岡第7分所(福岡県飯塚市二瀬)

介添人: 娘 モーリーン・コールさん(Ms. Maureen COLE)

#### パトリシアさんの話

このような機会を与えていただき感謝しています。夫はチャイナ・マリン(第4海兵隊のこと)に所属し、上海に駐留していました。駐留中に1941年11月白系ロシア人女性と結婚し、子どもを1人もうけましたが、その子が生後8日目に戦争に駆り出されフィリピンに送られて、1958年まで帰国しませんでした。帰国後、入院中にロシア人女性から離婚してロシアに帰りたいたいという手紙をもらいました。自分はテキサスにいて、彼女は中国にいたのですから、どうすることもできず離婚しました。私自身は1954年に海兵隊に入隊し、その後夫と出会って1955年結婚しました。夫は戦争後遺症のせいか、感情をうまく表すことができませんでした。私自身が海兵隊員だったこともあり、夫とは時には離婚の話が出ることもありましたが



左よりパトリシアさんとモーリーンさん

が、結婚生活を続けていきました。彼は晩年自分が設計した美しい家に住み、息子3人と、ここにいる娘1人に恵まれました。夫は息子に対するしつけがあまり上手くできませんでした。そこにも戦争の影響があったのではないかと思います。

#### モーリーンさんの話

私は1950年代に生まれました。その頃戦争のことはアメリカ人の記憶に新鮮に残っていました。それはジョン・ウェインが出演した映画などがあったからです。そのような映画と一緒に見た子どもたちの中で、私だけは実際に戦争に行った父を持っていました。父は他の人たちより少し年上だったと思います。22歳で上海に行って、他の女性と結婚していたからです。多くの娘にとってそうであるように、父は私のヒーローでした。捕虜だったということは子どものころから知っていましたが、捕虜ということの意味は大きくなってから知りました。父は戦争体験を語ることはありませんでしたが、60歳代後半になって戦争のために受けた障害に対する手当を受給するためあって、ようやく語り始めました。私は父の昔の医療記録を見て、初めて彼がどのようなことに苦しんだかその体験を詳しく知りました。晩年は100パーセントの障害手当を受けることが出来ました。戦争というのは、一家離散を招くものですが、父もロシア女性との間に儲けた娘と生後8日目で生き別れ、その後会う事は出来ませんでした。

#### 5. ルース・ウィルバー・シーブスさん(Mrs. Ruth WILBER SHEAVES) 89歳

夫は元捕虜の故 Charles O. WILBER: 米陸軍航空隊兵器中隊。ミンダナオ島で捕虜→同島のカシサン収容所→鳥取丸で日本へ→東京第2分所(川崎扇町)

介添人:娘 リンダ・ヴァン・スカイクさん(Ms. Linda VAN SKIKE)

#### ルースさんの話

結婚した時、私は18歳でした。夫は召集ではなく志願して入隊しました。当時ドイツと戦う兵を募っていたので、ドイツで戦うと思っていたのですが、フィリピンに派遣されました。フィリピンはとても暑いところでエアコンも無く、そのため朝早く、あまり暑くならない時間から働いたようです。夫は優しい人で、私たちは49年間結婚生活を続け、今隣りにいる娘が生まれました。彼はフィリピンの収容所では何度もマラリアに罹り、川崎では脚切断の危機に遭いましたが、カーティン医師の献身的な治療のお蔭で命を救われました。帰国から2、3年後、元捕虜の会(全米バターン・コレヒドール防衛兵の会=ADBC)に参加し、仲間たちと体験を分かち合う中で劇的によい意味で変わっていきました。家族はその会にどんなに救われたかわかりません。夫は食料を扱う隊に所属していましたが、経験を分かち合うことが良かったです。



左よりルースさんとリンダさん

#### リンダさんの話

父はフィリピンから「鳥取丸」という船で日本に送られました。1600人もの捕虜が狭い船倉に詰め込まれ、多くの人がマラリアに罹っており、船内で死亡した人も沢山います。父は川崎の収容所に収容されていましたが、今回、来日2日目にこの収容所跡を訪ねました。POW研究会の皆さんがこの収容

所のことを非常によく調べてくれていて、本当に感謝しています。こういう調査をしている方々がいるとは思ってもみませんでした。（東京第2分所での捕虜の集合写真を見せ）ここに父がいます。アメリカ人は空襲している時、まさかそこに捕虜がいるとは思っていなかったのです。これは7月の最もひどい川崎空襲の後の写真です。父は色々な所で働きましたが、この建物の上の看板には、「Come after us」（私たちに続いて来い）と書いてあります。（解放後、日清製粉岸壁で上陸用舟艇を待つ捕虜たちの写真を見せ）父は自分たちを救いに来てくれる船に向かって、帽子を被って敬礼している人物です。父は嬉しさの余り、興奮して海に飛び込んだそうです。もしかしたら、3年半も耐えてきたのに、解放直前に溺れて死んでいたかもしれないと、後に父は冗談に言っていました。多くの捕虜はマラリアに罹っていましたが、捕虜には一日に2分の1カップの米しか配給されていなかったのです。さらに病人にはその半分の食事しか与えられず、4分の1カップだけでした。このような調査をしてくれた方々に本当に感謝しています。父は愛情深い男性でした。日本の文化を愛し、日本語での会話を楽しんでいました。幸せな晩年を過ごしました。私自身は、以前1969年からしばらく横浜の根岸ハイツに住んだことがあり、娘は横浜で生まれ、娘夫婦は今横須賀に住んでいます。

\*\*\*\*\*

#### 参議院議員の藤田幸久氏の挨拶



私は2009年にアメリカの元捕虜の招聘のために活動し、元捕虜来日を受け入れるために超党派の議員連盟をつくりました。それ以来、この日米草の根交流プロジェクトに関わってきました。今日いらした方々のご家族が、捕虜として大変つらい思いをされたことにお詫び申し上げます。

2014年には日立市の捕虜収容所にいた元捕虜の方に同行して、現地を訪ねました。彼は日立の鉱山で使役されたのですが、収容所所長は親切だったそうで、憲兵が近づいてくると「働いているふりをしろ」とアドバイスして、病気で弱っていた彼を憲兵の虐待から守ってくれたり、弁当を分けてくれたこともあったそうです。昨年は茨城県霞ケ浦で撃墜されて捕虜になった空母艦載機の元飛行士の方に同行しました。湖に墜落した彼を、地元の漁師が救助してくれたそうです。

日本の天皇皇后両陛下は、太平洋戦争の激戦地を訪ねて慰霊の旅を続けておられ、昨年はパラオのペリリュー島を訪れ、今年1月にはフィリピンを訪問されました。フィリピンは日米の激戦が行われた地で、今日いらした方々のご家族はフィリピンで戦われた方ですが、両陛下は平和のために戦われている特別な方々です。先ほど、日清製粉の話が出ましたが、この会社の創業者正田英三郎氏は皇后陛下のお父様です。

この夏、オバマ大統領が広島を訪問しました。大統領は、広島と長崎は新しい戦争の夜明けではなく道徳と目覚めの夜明けだと、仰って下さいました。捕虜問題も人道的な問題であると同時に、道徳の問題だと思えます。懸け橋となって来日された皆さん方に心から感謝いたします。今朝、皆さんを議会にお招きしようとしたのですが、メンバーが他の会議に関係していたのでお招きできませんでした。そこで私が代わりにお伺いしました。

※この後、ローズ・ブリッジスさんの夫の誕生日を祝い、参加者の1人で歌手の藤沢麻衣さんのリードで「Happy・バースデー」を歌い、旅行社（近畿日本ツーリスト）から差し入れのケーキを皆さんに召し上がっていただきました。モナ「ありがとうございます。彼がここにいたら、本当によかったのに！」

\*\*\*\*\*

## 質疑応答

**Q1. 来日して皆さんの気持ちが変わりましたか。その契機となったのはどんなことでしたか？**

**クリスティン**

まず飛行機が素晴らしかったです。ビジネスクラスの豪華なシートで、アメリカでは見たこともないボタンがたくさんついていました。日本はここまで技術が進歩したのかと驚嘆しました。これまで日本は遠い国で、父が戦争で戦った国という認識しかありませんでした。母は私たち子供に「人には親切に」と教育してきました。彼女は日本のことを悪くは言いませんでしたが、日本車を買ってはいけないと言いました。しかし今、私も夫も日本車に乗っています。これまで日本人と接触してことはありませんでしたが、通訳ガイドのまやさんをはじめ、日本人は親切で素晴らしい人々だとわかりました。素敵な皆さんとお会いできてとても嬉しく思っています。

**モーリーン**

今回来日して多くの親切な人々に会うことができました。まやさんは親切で素晴らしい日本人の代表です。私は大学で歴史を専攻しましたが、歴史を次世代に継承することの大切さを改めて痛感しています。平和を築いていくために、日米だけでなく多くの国の人が対話し、お互いの立場の違いを乗り越えて平和を継承していくことが大切だと思います。

**リンダ**

研究会の皆さんの調査に心から感謝しています。父のいた収容所跡地を訪ねた後、ホテルに戻った時、とめどなく涙があふれてきました。それは、父の苦難の日々を思っただけの悲しみの涙でもありませんでしたが、尽力して下さった方への尊敬と喜びの涙でもありました。こうした取り組みは、本当に多くの人に影響を与えていると思います。アリガトウゴザイマシタ。

**ルース**

夫はいつも笑顔を教えてくださいました、日本人に対してもネガティブな人ではありませんでした。

**モナ**

我が家にはいつも近所の人たちが食べに来ていました。父は「お腹がすいては何もできない、お腹を満たし、働いてこそ、支払いも出来るんだよ」と言って、家にはいつも沢山の食料がありました。彼はまた「憎しみを持ってはいけない、他人が嫌がるようなことをせず、喜ぶようなことをしなさい」とも教えてくださいました。日本に来て最も印象的だったのはトイレ（ウォシュレット）。あんなに沢山のボタンの付いたトイレはアメリカにはありません。父のためにHappy・バースデーを歌ってくれてありがとう、本当に久しぶりに涙が流れました。

**Q2.** (西島) 私は海外の研究所に勤務してことがあります。ナッシュビルにいた時、よく近所の人々とバーベキューパーティなどをしましたが、戦争体験についてお互いに語ることはなく、なんとなく避けていました。しかし、今日は皆さんから初めて戦争体験を聞くことができ、勝った側にも辛いことがあったのかと、とても勉強になりました。

ローズ

テネシー州にいた方の話がありましたが、夫はギターが上手で、バンドではとてもカッコいい男性でした。

モナ

母は言いませんでしたが、母も同じバンドにいて、とても素敵な女性でした。

**Q3.** お話を聞いて、戦後の平穏な暮らしのためには、経済的な生活の安定も必要だと思いました。そこで今回大統領に選ばれたトランプ氏についてどう思いますか？

モーリー

アメリカは多様な社会なので、地域や個人の生活状況、都市部か田舎かでも意見が様々に分れている。私が住んでいる地域は民主党の地盤。簡単には答えられない質問だと思う。

**Q4.** ローズさんにお尋ねします。戦争から帰ってきた時、捕虜体験を語らないという署名をさせられたそうですが、それはなぜだったのでしょうか？ 他の人たちもみな署名させられたのですか？

ローズ

全員署名をさせられました。理由は全く説明されなかったのでわかりません。ある捕虜は病院で手術に向かう時に署名を強制され、署名しないと手術が受けられないような感じだったようです。

パトリシア

夫は戦後 25 年間も海兵隊に所属しました。署名までさせられたかどうかはわかりませんが、話さないようにとは言われていました。夫からは聞いたことがありませんが、そういうことがあったと誰かから聞いたことがある。

クリスティン

署名させられた理由はよくわかりませんが、1945 年当時日本は敗戦で悲惨な状況でした。そこで米政府は平和への対話に向け、過去のことにふれないよう配慮したのではないかと思います。今回私たちは和解のための旅に招聘していただきました。この体験を今後平和にむけてどう生かすか考えていきたいと思っています。

パトリシア

夫は 1953 年に再び日本に来て 2 年間駐留しましたが、とても複雑な感情だったそうです。1 年余りして、(日本人の) 誰かを殺してしまうのではないかという恐怖に襲われ、他への転勤を希望しました。私も本当は日本に行きたくなくて、でもルースに誘われ、歴史に興味のある娘にも強く誘われてしぶしぶ来ました。今は本当に来て良かったと思っています。特に幼稚園の子供たちと接してとても嬉しかったです。神のご加護を、あなた方に、そしてアメリカ合衆国に！(そして日本にも！)

\*\*\*\*\*

## POW 研究会共同代表・内海愛子氏の挨拶

私たちはこれまで捕虜本人の話を聞いてきました。元捕虜の人たちの話も胸に迫るものでしたが、彼らに寄り添ってきた人びともまた違った形で戦争を体験したのではないのでしょうか。私は教師なので、いつも学生に父や祖父の戦争体験を聞くようにと言い続けてきました。しかし、話せない、話したくないと、聞き取ることができなことがしばしばありました。体験を言語化することがどんなに困難かを実感しています。



マッカーサーがフィリピンを解放した時、アウシュビッツのような捕虜収容所の惨状を見て激怒し、虐待の責任を追及すると抗議しています。『ニューズウィーク』誌も、バターン死の行進について記事を掲載し始め、アメリカ中が怒りで歯ざしりしたといっています。それが「ポツダム宣言」第10項になり、戦後の戦犯裁判につながっていきました。

またもう一つ、泰緬鉄道にいたオーストラリアの元捕虜から、お話を聞いたことがあります。コレラや熱帯性潰瘍などの病人を隔離していた小屋で働いていた人です。あまりの惨状に彼は家族にも自分の体験を語りませんでした。話すと当時の光景がよみがえって自分がどうにかなってしまいそうで語れなかったのです。しかし、1980年代になると日本とオーストラリアとの関係もかわり、日本人と接触することが多くなり、どうしても話さなければならない状況になったので、歴史学者の助けを借りて、ようやく戦争体験を語り、彼はようやく戦争の記憶から少しずつ解放されたのです。その間、一緒に暮らしてきた家族もまた、語らない、語れない夫や父親の深い心身の傷を共に背負って生きてきたと言えます。

皆さんは今日、来て話してこうしてお話してくださいました。語ることで傷を克服し、出会うことでお互いの理解を深めていくことも、少しは出来ると思います。これからも出会い、より理解を深めていくために、ともに活動ができればと思います。今日は、遠いアメリカから、どうもありがとうございました。心から感謝します。

(記録：小宮まゆみ・笹本妙子)



最後に皆で記念写真